

あゝ十三里、野をわきて、
注げば此處にかんたんの、
海いと廣く漂茫と、

煙は迷ふ波の上、
潮路をわけてはるばると、
通ふ漁船の影も見ゆ。

知 歌

紀念會祝歌

學ひやのそのもとつ日を祝きてなほ行く末を祈るけふかな
篠をたち尾花を刈りて大柱多ふたてそめし昔をそれもふ
千よろつの末の世までもさかへなむほまれたつ田の文の林は
柳川 眞榮
成田 忠 良
堀 勇 吉

小 萩 集

さゝ栗をあまた拾ひて歸りけり秋の山路の家つとまてに
失戀の心の痛手に堪へずしてたけきものゝふたゞ死を願ふ
墓原の松の老木のみき朽ちて暗きうつろに死の神ひそむ
大章魚のすまへりといふその海の底深くしていつも濁れり
心すみてねられぬまゝに起き出てゝ芭蕉にそゞる雨の音をきく

そ ま を

いさゝ小川前をながれて竹一むら後をかこむわが友のいへ
 雑木山のその山の中に人家ありて梭の音きこゆその家の中ゆ
 わが家は水多きところ庭にひきて瀧落すべく池たゞふべく
 死にまさる苦しみを負ふ身にはあれど死なんとなればをしまるゝ命
 きのみまで二葉のこりし桐の葉のよべ一葉ちりてさみしくなりぬ

○
 花の如き乙女はあれど月に似たる男はあらず我すめる村
 紫のりぼんにつけて參らせんうるはしき花はつかしき歌
 やれ寺のうらの古井戸年をへて人汲ますなりぬいみたほしとて
 淋しらに物おもひ居れば高圓の山の木かけにきゞすなくなり
 せんさいに白き萩咲きうら庭に清き池あり我どもの家
 アポローの神をかしこみ妹とむがうた奉る戀もするかな
 遠きく國に行くといふますらをの猛男等が舟に春の雨降る
 古寺のうらの瘦畑夕日照り赤き鶏頭たゞふたつ立つ
 團子坂のいつはりの花は見にも行かし賤が籬の只一本を
 煙立つあその神山入りてりて時雨ふりそゞくたくまのゝ原

し
 は
 う

鐘
 山
 人

君が庵は小川の東堤づたひ月明かき夜に友多くつとふ
鐘つき夫佛にざんげするをきけば戀に堪へぬわが身救へと
日毎よごと流るゝ水に二十年の戀こひわびて渡守老いぬ
歸るといふ友を送りて里川の堤にほそき月を見しかな
鳥もどばず雲もうごかぬ大海のはてなき空に夜の幕れつ
法の師が鐘つき了へてかへるさの小路を照らす月の影かな
入江こわて森見ゆるところ小さな藁家はたてり伯母君の家
いで湯あびてかへる野末の風をさむみ雲仙の山ゆ月ほそう出でぬ
朝やけの花やぐ頃ひ豊の國や高田の湊われ舟出しぬ
夕暮のとなき頃を庭にいでゝ小萩がもとの蟲を聴くかな
朝たちて小國三里の廣野くれば煙はなやぐ阿蘇の神山
馬子が謠は麓路とほくへだくりて峠の茶屋に小雨するなり
馬子がうたふ歌の一節ねほゑねきて峠越すときわれ謠はむか
湊いでゝかへり見すればひんがしの國東山に月わたる見ゆ
鳥よばず水さゝやかず森の中にわれひとり立ちて今日の日暮れぬ
争ひて君泣く鬢のふるひ見つゝわれまた泣きし昔もありけり
旅にして血しほかれたるあが腕に縋りて泣かん人の子もがな

思ひわびて磯べに立てばゆく秋の鐘はかはらず淋しかりけり
 萎れたる花環取りあげ胸にあてゝ眉根ひそませわが泣く夕
 葦の間を舟出し居ればひんかしの森のかなたに月さしのぼる
 旅にいでゝ峠に雨をいたむ時ぞはじめて家は戀しかりける
 秋ふけて里のわらべが木の實ひろう栗の林に風わたるなり
 ○
 中庭に水うち居ればつばぶきの葉影はひいづる大ひきがへる
 いてふ葉のふりつむところ祠ありて頬白なくよ檜木のうへ
 ○
 うら枯れし草ふみわけて里の子が百舌れとすべく野はなりにけり



檜

雨

や

な

ぎ